コレンテ　vol. 45　n.401　aprile 2024

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

＊ローマの美術館にて＊

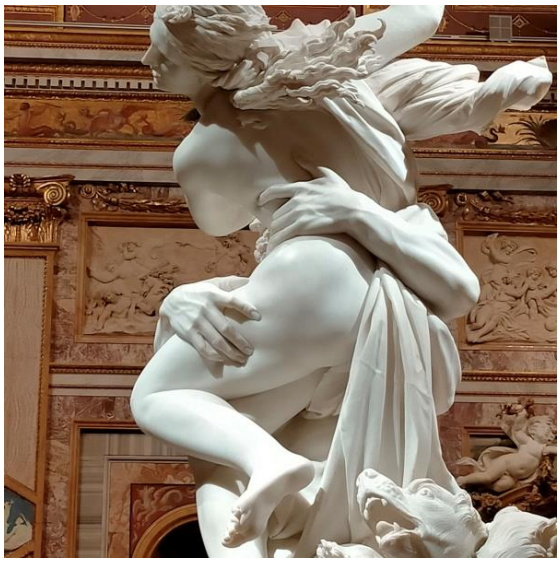
深草　真由子

ひさしぶりに美しいものをこの目で見たいという思いが募りに募っていたので、ローマに行く用事ができたのをさいわい、芸術を思いっきり楽しむことにした。見学することができたのはボルゲーゼ美術館とドーリア・パンフィーリ美術館である。いずれも訪れたのは今回がはじめてのことだった。

まとまった時間がとれず、かけ足で見学することになるなら、またの機会にしようと思って、いつも延ばし延ばしにしてきた美術館めぐり。入場料は決して安くはないということもあり（年々値上がりしているように思うのは私の気のせいだろうか？）一度入ったらゆっくり時間をかけて隅々までじっくり見てまわりたい。ただ、時間にも体力にも限界がある。だから今回はあれもこれもと欲張らず、気分転換ができればいいというくらいの軽い気持ちで出かけることにした。

ボルゲーゼ美術館はローマの街の北門のすぐ外に広がるボルゲーゼ公園の一角にある。テルミニ駅から 30 分ほど歩いただろうか。世界的に名高い美術館でありながら、規模はそう大きくないのか、建物そのものは思いのほかこじんまりしていた。ただその周辺にも狭いエントランスの中にも、人がいっぱい。ルーベンスの特別展の初日ということもあってか、観光シーズンでもないのに、キャンセル待ちに長蛇の列ができるくらいの盛況ぶりである。美術史専門のガイドが案内してくれるグループツアーのチケットを前の日にゲットできたのは、ほんとうに幸運だった。

もともとボルゲーゼ美術館は、17 世紀にシピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿（当時のローマ教皇パウルス 5 世の甥）が、自分の収集した芸術品を保管するために建てた館である。市街地の拡張工事が行われる中で発掘された古代ローマ時代の彫像やルネサンス期の絵画などがある。



【ベルニーニ『プロセルピナの略奪』】

なかでもジャン・ロレンツォ・ベルニーニ作品のコレクションが有名で、私もこれを楽しみにしていた。ベルニーニは 17 世紀のバロック時代を代表する万能の芸術家である。ナヴォーナ広場の四大河の噴水、スペイン広場の舟の噴水、バルベリーニ邸（バルベリーニ美術館の入っている建物）など、ローマの街を行けば出会うことのできる美

しいもののいくつかは彼の手になる。

ボルゲーゼ美術館には、まだ駆け出しの若いベルニーニがボルゲーゼ枢機卿の注文を受けて制作した彫刻作品—ラテン語詩人オウィディウスの変身物語などを基にした『プロセルピナの略奪』と『アポローンとダプネー』や、旧約聖書のイスラエルの王『ダヴィデ』など—がある。

ベルニーニの傑作はいずれも、天井も壁も(ときには足元までも)豪華に飾られた部屋の中心に置かれているので、正面からだけでなく、いろいろな方向から見ることができるようになっている。アポローンに捕らわれまいとするダプネーが月桂樹に変身していくようすは、その一瞬一瞬をスローモーションで目撃しているようだし、身体をよじって石を投げようとするダヴィデの、その視線の先には、巨漢ゴリアテが本当にいるのではないかと思うくらいに迫力がある。そしてなんといっても一番驚かされるのは、やはりプロセルピナの太ももだろう。地下の神プルートーンのゴツゴツした手がそれをとらえ、指が食い込むことによってできた凹みが、若々しい乙女の清らかさを象徴しているかにみえる。

硬い大理石のブロックを削り落としながら、人物のダイナミックな身体の動きや感情をこんなにもナチュラルに表現することができるなんて！20代にしてベルニーニはすでに巨匠であった。

ガイドの方が「世界でもっとも美しい背中」と絶賛していたカノーヴァ作の『パオリーナ・ボナパルテ』の彫像(背中も確かにいいが、パオリーナが横たわっているベッドの柔らかそうなこと。これが石だなんて信じられない)、そしてカラヴァッジョのコレクションを堪能して、ティツィアーノの『聖愛と俗愛』の飾ってある部屋を見学していたところで、閉館のアナウンスが流れた。急いで出口へ向かう途中、立ち止まることもなく通り過ぎた部屋にはラファエッロの作品もあり、ほんとうに後ろ髪をひかれる思いで美術館をあとにした。ここには必ずもう一度、戻ってこなければ…。

ローマで行くことのできたもう一つはドーリア・パンフィーリ美術館である。ショッピングを楽しむ観光客でごったがえすヴィア・デル・コルソにある。何度も行き来したことがある通りなのに、店に並ぶ商品などに気をとられてか、そこに美術館があることに気づいたのは今回が初めてだった。たしかにいかにも歴史のありそうな建物である。

ちなみに、すぐそばのヴェネツィア広場は一部封鎖されていて、地下鉄の駅の建設工事がすすんでいた。また、美術館の裏側に「めす猫通り」というかわいらしい名前の道があり、ほんとうに猫がいるのかどうか確かめに行くつもりだったのだが、美術鑑賞を終えたあと、そんなことはすっかり忘れてしまっていた。

ドーリアといえば海軍提督のアンドレア・ドーリア、アンドレア・ドーリアといえばジェノヴァである。そのジェノヴァの名門ドーリア家とローマのパンフィーリ家が婚姻によって結ばれ、ドーリア・パンフィーリになった。美術館の入り口で貸してもらえるオーディオガイドはその設定がユニークで、ドーリア・パンフィーリ家の末裔だという人物が私たちを出迎え、屋敷の部屋一つ一つを案内してくれることになっている。

【ベラスケス『インノケンティウス 10 世の肖像』】
出典:https://it.wikipedia.org/wiki/Papa_Innocenzo_X

この美術館の宝の一つは、パンフィーリ家出身の教皇インノケンティウス 10 世を描いた、ベラスケスによる肖像画である。他にローマ時代のカラヴァッジョが残した作品もあり、この二人の画家に

は特別に展示室が設けられている。

その他の画家の作品は、持ち主が見たいものを見たい場所に置いたということ以外にこれといった基準はないのではないかと思うような並べ方で、壁一面を覆うように飾られている。目がまわるほどの数があり、そのすべてはこれまた立派な、金色の古い額縁の中におさめられている。その額縁の下部には作者の名前が黒インクの手書きで書かれてあるが、その情報は必ずしも確かなものではなさそうだ。芸術品をこんなにたくさん集めていれば、本物ではなく模作であることが後になって判明したりすることもあるのだろう。どういった経緯で入手され、どのような形でカタログに記録されてきたのか、作品それぞれの歴史をたどることができればおもしろいかもしれない。

ドーリア・パンフィーリ家に熱心なファンがいたようで、ブリューゲル一族の作品がいくつもあった。その中の一つ『ナポリ港の海戦』は、南イタリアを訪れたことがあるピーテル・ブリューゲル（父）の作品である。「農民画家」と呼ばれる彼が好んでとりあげたテーマの作品とは趣を異にするが、戦闘の場面全体を広く眺めることのできる空の一点から波のしぶきや建造物の細部までを緻密に描いているところにフランドル絵画らしさがあるように思う。それにしても、ローマでブリューゲルに出会えるとは思っていなかったから、なんだか得した気分だ。そんな嬉しいサプライズの効果もあって、この美術館でとくに気に入ったものをあげるとすれば、スケートで遊ぶ人たちの楽しそうな声が聞こえてきそうな、ブリューゲルの冬の情景である（調べてみると、これもどうやら息子による複製で、父のオリジナルはブリュッセルにあるらしい）。

長いあいだ心惹かれているヴィッラ・ファルネジーナには、残念ながら今回も行くことができなかった。ヴィッラ・ファルネジーナはファルネーゼ家によって購入されたのでこのように呼ばれているが、もともとは、アゴスティーノ・キージというシエナ出身の銀行家によって 16 世紀のはじめに建てられた邸である。それとおなじ時期にローマで活躍していたラファエッロ・サンツィオがここに見事なフレスコ画を残している。次にローマに行く機会があれば、早起きしてテーヴェレ川の向こう岸まで歩き、『ガラテイアの勝利』の前に立って、盛期ルネサンスの空気を胸いっぱい吸い込みたいと思っている。

【ラファエッロ『ガラテイアの勝利』】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Trionfo_di_Galatea

〈参考〉

ボルゲーゼ美術館

https://galleriaborghese.beniculturali.it/

ドーリア・パンフィーリ美術館

https://www.doriapamphilj.it/roma/

ヴィッラ・ファルネジーナ

http://www.villafarnesina.it/

（元当館スタッフ）

イタリアあれこれ⑧

＊全国通訳案内士　あまり参考にならない(?)受験体験記＊

杉　栄子

春、イタリア語ガイド業が本格的にシーズンに入る季節だ。新型コロナウイルスのための様々な制限が無くなれば外国人観光客は徐々に戻るだろうと思っていたのだが、私の予想とは異なり、彼らは雪崩のように一気に戻ってきた。今年も多くのイタリア人観光客の来日が予想されている。

私は 2015 年に通訳案内士を目指そうと決め、2016 年度の試験に合格し、2017 年から仕事を始めた。今回のコレンテでは、目指そうと思ったきっかけや、試験がどんな内容で、どんな風に準備をしたか（あるいは、しなかったか）について書きたいと思う。

通訳案内士の資格を取ろうと思ったのは 2015 年と書いたが、実はそれよりずっと前から、留学時代の知り合いや、その知り合いの知り合いなどが来日した際に、個人的に大阪や京都を案内するということをしていた。それはガイドとしてではなく友人として付き添うといった形だったので、もちろん無報酬のボランティアであったが、イタリアが大好きな私は数ヶ月に一度くらいのその出会いをとても楽しんでいた。

それがいつ頃からだったか、来日するイタリア人が急激に増え始めた。私のところに来る連絡も、最初は＜私の直接の知り合いである A さんからの紹介＞だったものが、＜私がいつか案内した B さんの知り合いである C さん＞とか＜C さんの紹介の D さん＞とかに変化し、芋づる式に次から次へと新しいイタリア人から毎月、多い時は毎週のように突然メールが届くという状態になってしまった。ボランティアで出来る範囲を超えていると感じたので、ちゃんと資格をとって仕事にしようと思ったのが 2015 年だったというわけである。

早速その年の通訳案内士試験について情報を集めて申し込んだ。一次試験は 8 月 30 日で、日本地理、日本歴史、一般常識、そしてイタリア語の 4 科目。合格点は目安としてそれぞれ 70 点と設定され、科目ごとに合否が判定される。全て合格すれば 12 月の二次試験に進めるが、ひとつでも不合格だとダメ。ネット上で過去問を検索し数年分の問題を眺めてみたら、出題範囲が余りに広く、試験の日までに準備は到底間に合わない、とやる気を失いかけた。が、合格科目は次の年まで持ち越せることを知り、それなら1科目だけでも合格しようと気持ちを切り替えた。

【下見で行った岡山城】

試験準備はもっぱら独学だったが、当時よく見ていたサイトがあった。「通訳案内士、独学、傾向、対策、教材」といったキーワードで検索をして、たまたま見つけた＜ハロー通訳アカデミー＞というサイトだ。通訳案内士専門の予備校で、2015 年の時点ではすでに廃業していたのだが、予備校の学院長だった方が個人でサイトを運営し、通訳案内士試験に関する情報を公開していたのである。一次試験の過去問は、地理歴史などの邦文問題だけではなく、10 ある外国語の問題も掲載されていたし、外国語での面接である二次試験の内容も詳しく紹介されていた。さらに受験者（合格した人も不合格だった人も）の体験談も読むことが出来て、勉強方法など非常に参考になるものだった。

とりあえず過去問に取り組むことから始めたものの、歴史と地理を少し勉強しただけで、あっという間に試験日を迎えてしまった。手応えがあったのはイタリア語のみで、それ以外の 3 科目は全く

歯が立たなかった。邦文科目に関しては選択問題だったことが救いで、ともかく全ての解答欄を埋めるだけ埋めた。翌日、どこかのサイトで見た解答速報をもとに自己採点したところ、歴史は 60 点ほどだったが、一般常識は 51 点、地理にいたっては 39 点という散々な結果だった。ほとんど勉強していないのだからしょうがないのだが、結果に少々がっかりしつつ、翌年に向けてやる気もおきないまま、夏が終わり秋になった。

そして 11 月も 20 日を過ぎた頃、驚きの一次試験の結果が届いた。イタリア語は無事合格(ほっ)。その他については、なんと歴史だけが不合格で、一般常識と地理は合格していた。にわかには信じられず、しばらく通知を眺めて呆然とした後、これは何かの間違いではないだろうかと思った。他の人の答案と入れ替わったのではとか、マークシートの解答欄をうまい具合に間違って、結果的に正解欄を塗りつぶしたのだろうかとか、普通ならあり得ない考えが頭に浮かんだ。結果通知には＜合格/不合格＞のみ記載されていたので、合格基準点について検索してみたが具体的な点数は公開されていないようだった。ただし、受験者の平均点が、合格の目安である 70 点と乖離していた場合には、点数の調整が行われることがあるらしいということがわかった。さらには 2015 年度の試験について、難問・奇問ばかりという感想がたくさんあったことも知った。想像でしかないが、おそらく点数調整が行われたのだろう。ともかくこれで、翌年は歴史の1科目だけを合格すれば二次試験に進めることになった。

このチャンスを逃す手はないと俄然やる気が出た私は、前述の＜ハロー通訳アカデミー＞のサイトを活用することにした。歴史のテキストをダウンロードし、YouTube 上で公開されている講義動画(12 本 24 時間)を視聴して学習した。市販のテキストでは山川出版社の『ビジュアル版日本史図録』を使ったが、歴史的建造物や美術品などの画像がふんだんに掲載されており、とてもわかりやすかった。満を持して受験した 2016 年度の歴史では 90 点以上を取ることが出来、無事に一次試験を合格、12 月の二次試験へ向けて準備を始めた。

二次試験はイタリア語での面接である。試験官はイタリア人と日本人の2名、所要時間は10分弱で、3 つのパートに分かれていた。まずは、日本人の試験官が日本語で読み上げる説明文を、その場でイタリア語に訳す課題である。説明文の内容は、日本に関する事柄で、例えば「新幹線はとても速い特急列車で、弾丸列車と呼ばれており・・・」とか、「蕎麦は痩せた土地でも栽培できるので世界各地で生産されているが、日本では信州が有名な産地で・・・」などといった具合である。試験官が読み上げている間はメモを取ってよいが、読み終わるとすぐに訳し始めねばならない。

それが終わると、次に3枚のカードを渡される。それぞれに「お正月」とか「御朱印」とか「ウォシュレット」といった、日本文化に関するキーワードが書かれている。受験者はその中からひとつ選び、イタリア語で説明するという課題である。説明が終わると、その内容についてイタリア人試験官が観光客目線で質問をするので、それに答えるのが 3 つ目の課題である。ちなみに、「入室して座ってください」とか「次の説明をイタリア語に訳してください」といった試験中の指示も全てイタリア語で行われる。

【二次試験対策のテキストなど】

こういった内容のため、日本の様々な事柄をイタリア語で説明できるようになる必要があった。私が勉強に使ったのは、三修社の『イタリア人が日本人によく聞く 100 の質問』という本と、2015 年 1 月～3 月に NHK ラジオまいにちイタリア語で放送されていた「ニッポンを話そう」シリーズである。どちらにも日本の文化や生活習慣、四季の行事などについて、イタリア語と日本語で説明が載っているので、繰り返し読んだ。

さらに自分で説明文を作る練習もした。これはやってみたことがある人なら共感してくれると思うが、イタリア語にする前に、まずはその事柄を日本語で説明することが意外と難しかった。例えば、最近は外国人観光客もよく使う「交通系 IC カード」。「IC チップが内蔵されているプラスチック製のカードで、現金を前もってチャージすることでプリペイドカードとして使える。電車やバスなどの交通機関のほか、自動販売機やコンビニでも支払いに使える」といった具合に、短い説明文を作りイタリア語に訳すという作業をした。テーマは過去問から拾い集めたが、結局のところ二次試験までに作れた説明文は 50 にも満たなかったと思う。

準備をやり切ったという感覚はなかったが、あとは運に任せようと臨んだ二次試験。ふたを開けてみれば、1 つ目の課題も 2 つ目の課題も、どちらもすでに準備していた事柄、それも当日の朝に確認したばかりのテーマだったから、頭の中でガッツポーズを繰り出した。そして面接中は、昔、先輩に教わった「少々間違っても（もちろん間違えない方がいいに決まっているのだけれど）大きな声ではっきり話すと上手に聞こえる」という通訳のコツ（？）を心がけて話した。

こうして試験が終了、翌 2017 年 2 月に合格通知が届き、4 月から通訳ガイドの仕事を開始した。ほぼ勉強せずに地理と一般常識を合格してしまった私が言うのもなんだが、試験勉強で得た知識だけではガイドをするのに全然足りない。実際にお客様を案内する時は、歴史や文化、訪問箇所についてのさらに詳しい情報や知識が求められる。現地に行ったり、研修に参加したり、本を読んだりして、自分なりの説明文を作ってはイタリア語に訳すという二次試験対策で行った作業を、今もずっと続けている。調べるのはそればかりではなく、そこへ行くまでの交通手段や、その周辺で食事や休憩ができるところも知っておくことが必須だし、出来れば美味しいカッフェが飲めるところも知っておくとイタリア人から喜ばれることもある。

最後に一次試験のイタリア語について。私が受験した時は必ず受けなければならなかったのだが、現在は実用イタリア語検定 1 級を持っていれば免除される。また問題形式は、文法問題にしろ、和訳・伊訳問題にしろ、全て記述式だったのが、今では全て選択式になっている。なんかレベル下がった？と思いきや、解答には似たような表現の選択肢が並んでいて紛らわしくなっているので、一次試験ではイタリア語を正しく読む力がより求められるようになったと言えるかもしれない。

イタリア語以外の科目については「通訳案内の実務」が追加されているし、他にも変更があるかもしれない。これから受験を考えている人は公式サイトで最新情報を確認してくださいね。

【美味しいカッフェは必須】

（当館語学講師）

編集・発行 / **（公財）日本イタリア会館**
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075)761-4356/FAX: (075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/